

(平成28年4月24日)

第17回赤松小三郎研究会のご報告

日時 : H28. 4. 19 (火) 18:30~20:30
場所 : 東京・文京シビックセンター 4F B会議室
出席者 : 17名

今回は、参加者によるフリー・ディスカッション形式の研究会とした。宮原安春さん作成資料（赤松小三郎の事績の公平な評価と今後の研究テーマなどについて）を参考資料に意見交換を実施。

主な発言は以下のとおり。

- ・幕末にはオランダ語の洋式兵法書が広まり、翻訳したのは赤松だけではない。
- ・江川塾では石井修三が兵法書を翻訳している。
- ・石井修三は長崎海軍伝習所へ幕府伝習生として入所しているので、当然、赤松とも同所で面識があったものと思われる。
- ・赤松は伝習所時代に「新銃射放論」、「矢ころのかね小銃こう率」、「選馬説」を翻訳している。出版したのは「やころのかね小銃こう率」のみ。
- ・銃砲の進歩により、戦術が密集形から散兵形に変化したが、その際、各兵士が被る心理的恐怖心をどう回避するかが新戦法の要点である。
- ・幕末には農兵制度があり、武士以外の農民、商人も兵隊になった例がある。
- ・明治3年に新政府は兵式を英国式からフランス式に変えている。それに伴い、薩摩も兵式を英国式からフランス式に変えた。
- ・幕府には講武所と開成所があり、それぞれが独自にオランダ式、フランス式、英国式を研究していた。
- ・兵法のオランダ式、イギリス式、フランス式の間には大差はない。明治政府が陸軍をフランス式にしたのは、ロッシュの外交力による。

- ・フランス式は個々の兵士の体力を重視した。そのため、兵書に体操を取り入れている。英国式は個々の兵士の能力ではなく、隊形を重視した。
- ・中国（清）や李氏朝鮮は列強に植民地化されたり、日本に併合されたりしたが、日本が植民地化されなかった理由は何か。
- ・京都市主催の「大政奉還150周年記念プロジェクト」のHPに幕末維新の群像というページがあり、その先頭（あいうえお順）に赤松小三郎が紹介されている。
- ・「日本人物レファレンス」という図書に赤松小三郎が出ている。
- ・西周と赤松小三郎が京都の會津藩の洋学館の顧問になっている。
- ・慶応3年？ 7月23日にアーネスト・サトウと西郷隆盛が会談している。
- ・上田市立博物館の資料としては、小林利通さんが書いた「松平忠固・赤松小三郎」（平成6年発行）も参考として良いのではないか。また、小林さんが書いた「維新の信州人」（信毎編）中の「赤松小三郎—議会政治の先唱者」には興味深い記述がある。
- ・赤松の事績を広く知らしめるためには、宮原安春さんに「赤松小三郎評伝」を書いていただければと思う。関良基さんにもよろしくお願ひしたい。
- ・関良基さんが「赤松小三郎評伝」を現在作成中。
- ・赤松の建白書が、赤松→小松帯刀→後藤象二郎と伝達され、民撰議員設立建白書の基になったと考えられる。
- ・赤松はなぜ暗殺されなければならなかったのかその原因を調べる必要があるのでは。
- ・赤報隊の相良総三と松尾多勢子の関連性を調査したい。
- ・上田藩の内部抗争を調べる。（兄の芦田柔太郎が巻き込まれている）

以上